

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(2)

——1920年代——

中 川 栄 治

序

前稿（「『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究(1)——19世紀末から1910年代まで——」『広島経済大学経済研究論集』第4巻第1号，1981年4月）において，わたくしは，主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として，19世紀末から1910年代にかけて発表された個々の研究の内容を整理する試みをなした。本稿はそのつづきであり，1920年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する個々の研究の内容を整理しようとするものである*。

(1) C.M.ウォールシュ（1926）

まず，ウォールシュは，1926年の著書において，さまざまな価値のうちの一つである経済価値（economic value）は「使用価値」（use-value），「尊

* 前稿におけるのと同様，諸研究の発表年度の区分は，原則として，著書の場合には，その原版もしくは初版が出版された年度に，論文の場合には，それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に，したがった。ただし，本稿で使用した文献は，必ずしも原版，初版のものではない。

重価値」(esteem-value),「費用価値」(cost-value),「交換価値」(exchange-value)という四つの種類に分類できるとし、スミスの議論においてそれらの「価値」がどのような形であらわれているのかということに言及するのであるが、その脈絡のなかで彼は、スミスの議論における価値尺度に関連するつぎのような見方を示している。

①スミスは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited ... by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, 1937, —以下, W.N. と略記する— P.33.大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年, <I>—以下, 大河内訳<I>と略記する。ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない。——57ページ。)と述べているが, ここでは交換には何の言及もなされていないのであって, ここで言われている価値は「交換価値」ではない。しかしまた, 労働者はつねに彼の労働にたいして同一の尊重 (estimation) を付すと言うことはできるかもしれない。だがこれは, たんなる「尊重価値」でありうるだけである。²⁾

②他方, スミスは, 交換は財貨と財貨のあいだにだけでなく財貨と労働とのあいだにも生じると考えていた。そのさい, いずれの交換においても, スミスの語法にしたがえば, 論理的には, 交換において相対する一方の側にとっての「価値」(“value”)は他方の側にとっての「価格」(“price”)に, 一方の側にとっての「価格」は他方の側にとっての「価値」に, 相等することになるのであるが,³⁾ 財貨と労働との交換の場合について言えば, つぎのようなことが生じることとなる。すなわち, 労働者が(彼自身によって)等しく評価される彼の労働を交換に供するとき, 彼はある時と場所において他の時と場所におけるよりも, その労働にたいしてヨリ多くのたとえば商品Aを得るといったことがあるかもしれないであろう。このときには, もとの量の商品Aをヨリ少ない労働で獲得できるのであるから, ス

ミスの語法からの論理的な演繹によれば、その労働者にとっては、商品Aの「真実価格」は低下したこととなり、また彼の労働の「真実交換価値」は増加したこととなるはずであり、他方、いまや雇主はもとの量の商品Aにたいして労働者のヨリ少ない労働しか獲得しないのであるから、雇主にとっては、商品Aは「交換価値」において低下したこととなる。⁴⁾

③ところで、スミスは、商品の「真実交換価値」を考えると、うへの労働者の観点と雇主の観点のうち、雇主の観点を取り、かつ、労働を「真実価値」の尺度として使用したのであるが、これは矛盾を含んでいる。というのは、労働はその労働者にとってのみ不変なものであったからである（ただし事実上、「交換価値」という意味においてではなく「尊重価値」という意味においてではあるが）。この問題に関連して、スミスは、労働はすべての物にたいして支払われる「最初の価格」(“the first price”)——また、「究極の価格」(“the ultimate price”)——であるとしている。⁵⁾ だがたとえそうであるとしても、ここで言われている「価格」は労働者によってのみ支払われるものであり、雇主が彼の所有する財貨でもって「労働を購入する」ときには、雇主自身にとってつねに同一の価値をもつものを買っているのではなく、労働者にとって同一の価値（ただし尊重価値）をもつものを購入しているだけなのである。労働者の標準は、適正には、雇主の標準⁶⁾にはされえないのである。

1) それについては、C.M. Walsh, *The Four Kinds of Economic Value*, Harvard University Press, 1926, pp. 4 ff, 15-16. 拙稿「アダム・スミスの価値論における諸価値および真実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から——」『広島経済大学経済研究論集』第1巻 第4号、1979年3月、219-225ページを見よ。

2) C.M. Walsh, *ibid.*, p. 5.

3) ウォールシュはここでも、前稿でみた1903年の著書において彼が示している「価値」という用語と「価格」という用語のスミスの使用法についての彼の見方にもとづいて議論を展開している。そこでは、ウォールシュは、スミスは「価値」という用語と「価格」という用語を区別しており、事物の「価格」をその事物を獲得するために我々が放棄するものあるいはその事物が我々をして費やさせるもの、事物

の「価値」をその事物を放棄することによってあるいはその事物を交換に与えることによって我々が獲得することのできるものとしている、とされたのであった。そしてまたウォールシュは、スミスは「交換価値」を「使用価値」から区別し、さらに、「交換価値」を貨幣での交換価値としての「名目交換価値」(簡略化して「名目価値」と「真実交換価値」とに区別しており、そしてこの「真実交換価値」を簡略化して「真実価値」あるいは「価値」とよんだ、とみるのであった。(C. M. Walsh, *The Fundamental Problem in Monetary Science*, Macmillan, 1903, pp. 46-47, 48. したがってまた、以下でみるウォールシュの議論のなかに出てくる「真実交換価値」、「真実価値」、「価値」は、「名目交換価値」と区別された意味での「交換価値」を、「真実価格」、「価格」は、貨幣での価格としての「名目価格」と区別された意味での「価格」を、さすものとして用いられている、とみてさしつかえないであろう。)

ウォールシュはこのような見方にもとづいて、1926年の著書において、財貨と財

財Aと財Bとの交換の場合

・財Aの所有者にとって:

財Aの「交換価値」あるいはたんに「価値」……………財B

財Bの「価格」……………財A

・財Bの所有者にとって:

財Bの「交換価値」あるいはたんに「価値」……………財A

財Aの「価格」……………財B

図—1

財Aが一日の労働と交換される場合

・財の所有者にとって:

財Aの「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」……………1日の労働

1日の労働の「真実価格」……………財A

・労働者にとって:

1日の労働の「真実価値」……………財A

財Aの「真実価格」……………1日の労働

図—2

貨のあいだの交換、財貨と労働とのあいだの交換について、つぎのような説明を与えている。まず、財貨と財貨のあいだの交換については、たとえば、財Aの所有者がその財Aを財Bと交換するときには、スミスによれば、財Aの所有者にとって、財Aの「交換価値」もしくはたんに「価値」は、財Bであり、財Bの「価格」は財Aである。そしてこの場合、財Bの所有者にとって、財Bの「価値」は財Aであり、財Aの価格は財Bである。(図—1を見よ。) 他方、財貨と労働とのあいだの交換については、たとえば、財Aが1日の労働にたいして与えられ、そして1日の労働

が財Aにたいして与えられるときには、スミスにしたがえば、財Aの所有者にとって、財Aの「真実交換価値」あるいはたんに「真実価値」は、その財Aにたいして彼が得るその日の労働であり、その日の労働の「真実価格」は財Aである。しかしその労働者にとっては、財Aの「真実価格」は、その財Aを得るために彼が与えたその日の労働であり、彼のその日の労働の「真実価値」は財Aということになるであろう——ウォールシュによれば、このことは論理上の帰結であるがスミスの議論では、このことは忘れられていた、とされる——。(図-2を見よ。) C.M. Walsh, *op. cit.*, pp. 4-5.

4) C.M. Walsh, *ibid.*, pp. 5-6.

5) ウォールシュによれば、スミスはこの考えをホッブスかあるいはテュルゴーかのいずれかから得たのかもしれない、とされる。C.M. Walsh, *ibid.*, p. 6.

6) C.M. Walsh, *ibid.*, p. 6. なおウォールシュは、スミスの議論では事実上「尊重価値」が「交換価値」の尺度とされているということそれ自体については、ことさら問題にしようとはしていない。また、ウォールシュによれば、以上でみてきたことは「あらゆる時と場所における」価値に関連するものであるが、「同一の時と場所における」さまざまな商品の相対的な価値については、スミスはそれらの価値をそれらの商品を生産するにあたっての地代および利潤とともに混ぜ合わされた労働—費用によって説明した、とされる。それについては、C.M. Walsh, *ibid.*, pp. 6 ff. を見よ。

(2) P.H. ダグラス (1927)

他方、ダグラスは、スミスは諸財貨のあいだの交換比率としての「交換価値」の決定因として効用をしりぞけて、価値の尺度ならびに源泉、決定因としての労働に注意を払う、とするのであるが、そこで言われている労働に関して、以下のような見方を示している。

①価値の尺度ならびに源泉として労働をとらえるばあい、労働の単位という概念が必要となる。では、労働が還元されてゆく分母とは何か。労働の強度や熟練等々の相違のゆえに、時間だけでは不十分である。時間、辛苦、熟練などを共通の単位に均等化することはスミスも認めているように容易なことではないが、この問題にたいするスミスの解答は、「市場のかけひきや交渉による調整」ということであった。ここには確かに、循環論的推論の傾向がみうけられる。すなわち、価値の尺度および源泉として役

立つものが労働であるならば、価値は労働の量によって説明されなければならないにもかかわらず、スミスはここでは、その労働量を決定するのに市場価値に訴えているからである。しかし他方、『国富論』第1篇第10章の賃金格差に関する議論によって、スミスはたぶん、この論理のどうどうめぐりから免れることができるかもしれない。⁸⁾

②スミスは(交換)価値の尺度ならびに源泉、決定因を労働に求めて労働価値説を展開するのであるが、その労働価値説は一元的なものではなく、事実上、そのなかには、価値を決定するものは、当該事物の生産に要する労働単位の量であるといった考え方と、当該事物が支配しうる労働量であるといった考え方という二つの考え方が含まれており、⁹⁾ 価値に関するこれら二つの説明は本質上きわめて違ったものであるが、それらはほとんど同じページでごっちゃまぜに並べたてられており、実際のところスミスはこれらの両者を同じ程度に強調し、両者を区別できなかったように思える。¹⁰⁾

7) P.H. Douglas, 'Smith's Theory of Value and Distribution', in J.M. Clark, P.H. Douglas, J.H. Hollander, G.R. Morrow, M. Palyi, J. Viner, *Adam Smith, 1776-1926*. Univ. of Chicago Press, 1928, reprinted, Kelley, 1966 (originally in *University Journal of Business* <Chicago> vol. 5, no. 1, January 1927. also in H.W. Spiegel ed., *The Development of Economic Thought*, Wiley, Chapman & Hall, 1952), pp. 77-78. 越村信三郎訳「スミス論」(スピーゲル編 越村信三郎、長洲一二監訳『経済思想発展史Ⅱ 古典学派』, 東洋経済新報社, 1954年) 3-8ページ。

8) すなわち、ダグラスは、そこでは自由な競争および生得の人間能力の平等性が暗黙的に仮定されたうえで賃金格差に関する五つの事情が考察され、自由競争をつうじての各部門間の賃金の平準化といったことが論じられるとするのであるが、ダグラスによれば、スミスはその議論をつうじて、不効用という意味での労働の均等な単位はいつかは等しい額の貨幣賃金によって償われるという事実を論証したと信じたのであり、そして、スミスにしたがえば市場はこうにして労働を構成する種々の要素を一般的な尺度に還元するのであり、この意味での等額の貨幣単位は、いつでも、等量の労働を表わすものとなる、というのである。P.H. Douglas, *ibid.*, pp. 81-88. 邦訳 7-16ページ。

- 9) なお、ダグラスは、前者の考え方を「労働凝固学説」(labor-jelly theory)あるいは「労働費用学説」(labor-cost theory)、後者の考え方を「労働支配学説」(labor-command theory)とよんでいる。P.H. Douglas, *ibid.*, p. 88. 邦訳17ページ。
- 10) P.H. Douglas, *ibid.*, pp. 88-89. 邦訳16—19ページ。なお、ダグラスは、「労働費用学説」は原始社会における価値を説明するためのものにすぎなかったものでありそしてスミスが「労働支配学説」を考えだしたのはより進歩した社会で価値がどのようにして定められるかということを説明するためであったということが時々言われるが、これは部分的にのみ真理なのであって、「労働費用学説」は、この原始的な社会段階に適用されたが、それはまた同じように、時として、さらに文明の進んだ社会にも適用されたのである、としている。P.H. Douglas, *ibid.*, pp. 89-90. 邦訳19ページ。

なお、ダグラスは、スミスの議論では「投下労働量」あるいは「支配労働量」による価値の決定という問題はそのまま価値の大きさを測定する問題でもあるということを明示的には述べてはいないのであるが、ダグラスは、スミスの議論における「価値の決定あるいは規制の問題」と「価値尺度の問題」とを同一視している。たとえばつぎのような彼の文章を見よ。「しかし、すべての商品がそれで売られるところの諸価格から、地代と利潤とが差引かれるとすれば、二つの価値尺度〔「商品の生産に要する労働量」と「商品が支配しうる労働量」という価値尺度〕のあいだに不一致が生ずるであろう。」(P.H. Douglas, *ibid.*, p.90. 邦訳20ページ。傍点および〔〕内は筆者。) また、そのようなものとしてのスミスの「労働費用価値説」と「労働支配価値説」についてのダグラスの検討については、P.H. Douglas, *ibid.*, pp. 88ff. 邦訳16ページ以下を見よ。

(3) E. キャナン (1929)

キャナンは価値を交換比率としてとらえるのであるが、彼は、このよう¹¹⁾な意味での価値の尺度についてのスミスの議論に関連してつぎのような指摘をなしている。

①スミスは、当該事物によってその所有者がはぶくことのできるもの(労苦と骨折り、労働)と、その事物が他の人々に課することのできるもの(労苦と骨折り、労働)という、二つの尺度が、異なる帰結をもたらす¹²⁾ということに気づいていない。

②スミスは、労働は測定することが困難でありそして諸商品はよりしば

しば他の諸商品とくに貨幣と交換されるゆえに価値は一般に労働では評価されないとしつつも、彼は、金や銀は価値において変動するのにたいし労働は価値において変動しないということから、労働は価値を評価し比較するための究極で真の標準であるとしている。¹³⁾しかしながら、これは、この世で価値の変動することのない一事物として、まったく恣意的に、労働を選び出しているにすぎない。¹⁴⁾

③異なった種類の労働は異なる報酬を受けるという事実についてスミスが『国富論』第1篇第6章で与えている説明は、驚くほど弱いものである。¹⁵⁾

11) E. Cannan, *A Review of Economic Theory*, (1st ed., 1929) 2nd ed., Cass, 1964, p. 170.

12) E. Cannan, *ibid.*, p. 165. このことを示すものとしてキャナンがあげているスミスの文章は、『国富論』第1篇第5章の第1パラグラフおよび第2パラグラフのなかに含まれている文章である。

なお、キャナンの所論にみられるこのような批判にたいして、R・L・ミークはつぎのような指摘をなしている。それによれば、「それによって彼自身がはぶくことのできる」労働の量と、「それによって他の人々に課することのできる」労働の量との、スミスのやや混乱した同一視の背後にある想定はつぎのものである。いまもしある商品の所有者がその商品を売ることと決めるとすれば、彼はその売上げでたとえば20日の労働を雇いうるかもしれない。これが、彼の商品が「他の人々に課することのできる」労働の量である。他方、20日というその時間に、彼が雇う労働者たちは、彼のために、たとえば50足の靴をつくるかもしれない。スミスは単純に、もしその商品所有者がみずから50足の靴をつくらなければならなかったとすれば、労働者たちが費やしたのと同じ時間すなわち20日かかったであろう、と想定する。こうして、彼の商品は、20日の労働を「他の人々に課し」、したがってそれだけの労働を「彼自身がはぶく」のである、というのである。R.L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, (1st ed., 1956) 2nd ed., Unwin Brothers Limited, 1973, pp. 67-68 n. 2. 水田洋、宮本義男訳『労働価値論史研究』（初版の訳）、日本評論新社、1957年、76ページ注2。

13) キャナンは、スミスが唯一可能な尺度として労働に依拠するについてスミスが与えた理由を示すものとして、つぎの文章（『国富論』第1篇第5章第7パラグラフに含まれる）を引用している。それは、「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう。健康、体力、精

神が普通の状態で、また熟練と技能が通常の程度であれば、彼は、等量の労働にたいしてはつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、それと引換えに受け取る財貨の量がどうあろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働が購買するのは、これらの財貨のうちのより大きい分量のこともあれば、より小さい分量のこともあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかに問わず、得がたいもの、すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは高価であり、また容易に入手できるもの、すなわちわずかの労働で入手できるものは、安価である。それゆえ労働だけが、それ自身の価値がけっして変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかに問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は、すべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(W.N., p. 33. 大河内訳<I>57-58ページ。)というものである。E. Cannan, *ibid.*, p. 165.

- 14) その理由をキャンナンはつぎのように示している。それによれば、スミスの考えにしたがえば、諸商品のあいだで以前とまったく同一比率での交換がなされていても、もし労働がヨリ多くの商品を生産するならば、それらの商品はヨリ安価に、ヨリ価値の少ないものになる、ということとなる。しかしこれはまったく恣意的にそうしているにすぎない。というのは、逆のことが言えないという理由はないからである。すなわち、諸商品が価値において変化したのではなく、いまや労働と交換にヨリ多くの諸商品が与えられなければならないであろうという限りにおいて、労働がヨリ大きな価値をもつようになった、と言えない理由はないからである。事実我々は、労働は、ヨリ生産的であるがゆえに、「ヨリ良い支払いを受ける」と、言う。ところがスミスは、労働はその生産性にかかわらず同一価値を受け取っていると述べることを、求めているのである。E. Cannan, *ibid.*, pp. 165-166.
- 15) もっともキャンナンはこの問題を、どちらかといえば、(交換)価値の尺度の問題というよりも(交換)価値の決定の問題という脈絡のなかで取りあげているのであるが(ただし、キャンナン自身がスミスの議論における「価値尺度の問題」と「価値決定の問題」とを区別しているというわけではなく、むしろそのようなことはことさらに問題にはされていないのであるが)、彼はつぎのような説明を与えている。それによれば、スミスはこの問題にたいして、労働時間、労働のきびしさにたいする斟酌に加えて、なみなみならぬ技能と創意を必要とする労働を行なう才能にたいする「高い評価」(「尊重」, "esteem")といったことから説明するのであるが(スミスがそのような説明を与えているものとしてキャンナンがあげている箇所は、『国富論』第1篇第6章の第2、第3パラグラフである。)、もし労働が標準であるならば、なにゆえにそのような「高い評価」が事態に影響を及ぼすのか。「妥当な報償」を基礎づけるヨリいっそうの力が存在するはずである。なぜなら、スミスが後の章

で説明しているように、もしそのような報償が得られないならその職業への参入者の供給が減少するであろうからである。だがこのことは、「高い評価」とは関係はないのである。E. Cannan, *ibid.*, pp. 166-167.

(4) I. I. ルービン (1929)¹⁶⁾

他方、ルービンによれば、スミスは価値の概念の分析に着手するさい、まず使用価値と交換価値を区別し、前者を彼の研究の範囲外におき、彼の全注意を交換価値に向け、このようにしてスミスはみずからを、各々の生産物がその生産者の必要の直接的な充足よりもむしろ交換¹⁷⁾に向けられるところの商品経済の研究に、堅固にすえる、とされるのであるが、ルービンは、スミスの議論に関してつぎのような見方を示している。

①スミスは非常に明確にまた絶対的に正しく彼の研究の対象——交換価値——を定めるのであるが、彼がこの対象を研究する視点という点では、彼が問題を提出する道すじには方法論上の二元性 (a methodological duality) が見出される。すなわち、スミスは、一方で、まず商品がどれほど多くの価値をもつかということを決定し第二にその価値の大きさの変化を決定するところの諸原因を明らかにすることを欲し、他方で、彼は、商品の価値を測定するために使用されうる正確で不変な標準を見出すことを欲する。彼は、一方で、価値の諸変化の源泉を暴露することを熱望し、他方で、不変の価値尺度を発見することを熱望するのである。ところで、問題提出のこれら二つの道すじの間にはある根本的な方法論上の相違が存在するという事、および、この相違がスミスの理論の核心のなかへある二元性を導入するにちがいないということは、明らかである。かくして、価値の実質的諸変化についての理論的研究が、価値の最良の尺度に到達しようという実的な課題と混同されるようになるのである。¹⁸⁾

②この混同の一つの結果として、交換価値についてのスミスの分析は、二またに分れたものとなり、そして二つの方法論的に異なる径路に沿って進んでいくこととなる。すなわち、一方は、価値の諸変化をひきおこすも

の発見であり、他方は、不変の価値尺度の探求である。¹⁹⁾

③彼の研究の最初において、スミスは、どこに「交換価値の真の尺度」が存するかということを問うのであり、また、そのような不変の尺度の探求ということが彼の注意の大部分を占めている（『国富論』第1編第5章）のであるが、なぜスミスが彼の分析をそのような方法論的に正しくない方向に向けたのかということを理解するためには、スミスは価値の尺度を発見しようという問題を彼の重商主義者の先行者たちから受け継いだということを、思い起こすべきである。²⁰⁾そしてまた、スミスがまず交換価値の尺度を問題にしたことには、スミスの一般的な個人主義的および合理主義的アプローチが価値尺度についての彼の探求のなかにも入り込んでいるといった事情もあった。²¹⁾

④それでは、生産物の価値の尺度あるいは指標とは何か。この問題にたいする解答として、スミスは、当該生産物との交換において獲得される他の諸商品や貨幣をしりぞけ、²²⁾そして、(社会的)分業についての彼の理論に訴えることによって、商品の価値の尺度を、その商品と交換に獲得もしくは購買されうる労働の量に求める。²³⁾

⑤価値尺度についてのスミスの理論は、労働者たちの社会としての交換社会という彼の考えから発しているように思えるのであるが、その理論はつぎのような欠陥もっている。すなわち、我々が、単純商品生産者の社会ではその社会の構成員のすべては、彼らの労働の生産物を、したがってまた彼らの労働自体を、交換する、と言うときには、我々は、「交換」という言葉を、二つの異なる道すじで用いている。つまり、一方では、労働の生産物は、実際に交換され、そして、市場においてお互いにある同等な関係に置かれるというものであり、ここでは、我々は、言葉の文字どうりの意味での交換をもつ。これにたいし、現実の労働の「交換」に関しては、我々は、本質的には、諸個人の労働活動が互いに結びつけられまた配分されるプロセス——労働生産物の市場交換と密接に結びつけられるプロセス——を、意味しているのである。ところが、そのような単純商品生産者の

社会では、文字どおりに言えば、労働のいかなる交換も存在しはしない。というのは、市場において売買されるのは現実の労働ではなくて、労働の生産物にすぎないからである。つまり、人々の労働活動は、ある一定の社会的機能を遂行する、しかし、それは、売買の対象ではないのである。我々がそこで労働の「交換」が存在すると言うときには、我々は、諸労働が社会的に同等にされる〔*uravnenie*〕ということの意味しているのであって、諸労働が市場において均等化される〔*priravnivanie*〕ということの意味しているのではないのである。したがって、我々が、人々が単純商品生産者として互いに関係する一つの交換社会において私が私の服地をだれか他の人の労働に対する支配を獲得するためにあるいはだれか他の人の労働を購買するために使用する、と言うときには、これはただつぎのことを言っているだけである。つまり、私は、他の商品生産者が作ったものを獲得することによって、その人の労働にたいしてある間接的な影響力を及ぼす、ということである。私は、私の生産物を、直接的には、労働の生産物と交換するのであって、だれか他の人の労働と交換するのではないのである。私の服地と交換に私が砂糖を受け取り、そしてそれによって、間接的に、その砂糖生産者の労働を受け取るのである。換言すれば、私は、他の人物の労働を、その人物が生産した生産物としてすでに具体化された (*materialised*) 形態で、獲得するのである。このことは、私の服地の、だれか他の人の労働とのすなわちある雇われる労働者の労働力との、直接的な交換とは、著しく異なる。すなわち、これら二つのケースは、たんに購買される労働の具体的形態（具体化された労働にたいする生きた労働）という点だけでなく、交換に参加する人々を結びつける社会的な関係という点でも、はげしく異なるのである。最初のケースでは、彼らは、単純商品生産者として、お互いにある関係に入るのにたいし、第二のケースでは、彼らは、資本家と労働者として、お互いにある関係に入るのであり、最初のケース（すなわち、一生産物と、それとは別の生産物とのあるいは具体化された労働との、交換）は、すべての商品経済の一つの基本的な特徴

を構成するのにたいし、第二のケース（すなわち、ある生産物の、生きた労働との交換、あるいは、資本の、労働力との交換）は、資本主義経済においてのみ発生するのである。そして、労働が直接的に、売買の対象としてあるいは商品（すなわち労働力）として機能するのは、第二のケースにおいてのみなのである。ところがスミスは、すべての商品経済に起こる労働の社会的「交換」（あるいはより適切には、同等化）を、資本主義経済に生じる売買の対象としての労働の市場「交換」と混同するという失敗を、おかしたのであった。かくしてスミスは、私は、私の服地でもって、他の人々の労働を獲得もしくは購買する、と言うこととなる。しかし、私は私の服地を、具体化された労働と（すなわち、だれか他の人の労働の生産物と）交換しているのか、それとも、ある雇われた労働者の生きた労働と交換しているのか、と尋ねられるときには、スミスは、いかなる明確な答えをも与えはしない。スミスは、「彼〔所与の商品の所有者〕が購買または支配しうる他の人々の労働の量、または同じことであるが、他の人々の労働生産物の量」（W.N., P31. 大河内訳< I >54ページ。〔 〕内はルービン。傍点の付されている箇所は、ルービンがイタリック体にしてゐる箇所。）について語るのであり、そしてスミスは、彼の分析をつうじて一貫して、労働の生産物と労働とのこの混同を、なしているのである²⁴⁾。諸商品の価値の、あるいは、単純商品経済の、分析のなかに、資本主義経済に固有な諸特徴を持ち込むことは、この分析のなかに、ある非常な混乱をもたらすことを意味する。そして、ある所与の商品と交換に購買されるところの、またその商品の価値の尺度として役立つところの、労働というスミスの概念は、実際には、二つの概念となり、あるときにはそれは「購買される具体化された労働」として現われ、またあるときには、「購買される生きた労働」として、現われる。このようなスミスの概念上の混乱は、商品経済において労働を「交換する」というプロセスの社会的な性質を把握することに初めから失敗していたという事実²⁵⁾に起因するのであり、彼は、それを、労働の市場「交換」あるいは労働の売買と間違えたのであ

た。彼は、一つの社会的機能としての労働を、一つの商品として機能する労働と同じものであると考えたのであった。²⁵⁾

⑥しかしそれでも、もし労働が売買の品目としてはたらくならば、それは実際に、一つの価値尺度として役立ちうるのか。ある所与の労働量は(「労働」に対して支払われる賃金の変動に依存しつつ)ヨリ多量のあるいはヨリ少量の商品を購買しうるであろうという事実のゆえに、労働自体の価値が変化しはしないのか。この困難性を免れるために、スミスは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう」(W. N., p. 33. 大河内訳くI)57ページ。)という命題を提出する。労働者が1日の労働をどれほど多くの諸商品と交換できようと、この1日の労働は、つねに、彼が「自分の安楽、自由、幸福」の同一量を犠牲にしなければならないということを、意味するであろう。彼が今日、1日の労働を、彼が昨年交換できたよりも2倍もの多くの服地と交換できたとしても、このことはたんに、服地の価値が低下したということを示しているだけである。労働自体の価値は変化したのではない、また、変化しえないのである。というのは、労働することの労苦についての主観的な評価は、不変に留まるからである。だがその場合に、ある所与の商品と交換に購買される労働の客観的な量が、その商品の価値の正確な尺度と考えることができるのである。ある所与の商品の価値が2倍になったということが納得されるためには、我々はただ、1日の労働で以前には購買することのできたその商品は今や2日の労働でもって買われうだけであるということを確認することだけが、必要なのである。たとえその2日の労働が、今や、1日の労働が以前に与えていたよりも多くの商品(あるいは賃金)を与えることがないにしても、2日の労働は、あらゆるときに、1日の労働とくらべて2倍の主観的労苦および骨折りを、表わしているのである。購買される労働の客観的な量が不変の価値尺度としてのその役割を保持することができるように、スミスは、労働することの労苦についての主観的な評価もまた不変であるということを、主張しなければな

らなかったものであり、ここに、客観的な諸要因と主観的な諸要因とのあいだのスミスの理論上の混乱（客観的諸要因が支配する傾向をもつところの混乱）が、顕著にあらわれるのである。前で、スミスは誤って、一つの社会的機能としての労働を一つの商品としての労働の意味に転じてしまい、そして、「購買される労働」を不変の価値尺度と考えたのであった。そしていまや、それ自体が一つの商品である労働に固有な価値における絶えざる変動を免れるために、彼は、購買される労働の客観的な量を、この労働が引きおこすところの総主観的骨折りおよび労苦に取り替えるのである。一つの社会的機能としての労働するという活動と、一つの商品としての労働との（すなわち、「購買される労働」との）混同、「購買される具体化された労働」と「購買される生きた労働」との混同、そして最後に、労働の客観的な量と、総主観的労苦および尽力との混同、これらの概念上の混同は、スミスが彼の研究を、価値尺度の探究という方法論的に誤った方向に沿って向けてしまったことに対して彼が支払わなければならない代価、なのである。²⁶⁾

16) ここでは、I. I. Rubin, *A History of Economic Thought*, translated and edited by Donald Filtzer, Afterword by Catherine Colliot-Thélène, Ink Links, 1979. のなかで示されているルービンの所論をみるのであるが、本稿で使用した前掲書は、ルービンの著書 (*Istoriya ekonomicheskoi mysli*) の第2・改訂ロシア語版第2刷 (the second printing of the second, revised Russian edition (1929)) のコピーからの英語訳版である。目下のところ筆者には、ロシア語版の初版の出版年度が不明であるため、発表年度の区分については、さしあたって、上記英語訳版に翻訳されることとなった原本の出された年度、1929年を記しておいた。

17) I. I. Rubin, *ibid.*, p. 186. なお、ルービンによれば、問題のこのような提出様式は節操のある、また明快なものであるが、スミスがそのような問題の提出様式をとりえたのは、分業に基礎を置く社会では各生産者は、社会の他の諸構成員によって必要とされている諸生産物を作っているであろうという分業についての彼の学説に、負っているものであり、そしてそれによって、スミスは非常に明確にまた絶対的に正しく彼の研究の対象——交換価値——を定める、とされる。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 186.

なお、ローゼンベルグは、スミスが使用価値を研究の範囲外におき交換価値のみ

を研究していることをルービンはスミスの成功とみなしている、とし、それに関してつぎのような批判をなしている。「マルクス主義的経済学を歪曲したルービンは、古典学派に対するマルクス主義的批判をも歪曲しているのである(彼はその『著書』をマルクス主義的なもののごとく見せかけている)。何となれば、スミスが交換価値を使用価値から切り離しているのは、彼が両者の区別のみを見てその統一に気付かないこと、すなわちまさに『商品経済の研究の土台の上に』立っていないことを示すからである。」D. ローゼンベルグ著、直井武夫訳『経済学史』(第1巻)、ナウカ社、1935年(ロシア語原本の出版は1934年)、313ページ。

- 18) I. I. Rubin, *ibid.*, p. 186. なお、ローゼンベルグによれば、ルービンは、スミスが一方では価値の変化の原因を発見しようと、他方では価値の不変の尺度を見出そうと努めていること、価値の実質的変化の理論的研究と最良の価値尺度を見出そうとする実際の課題とが混同されているということに、スミス価値論の批判の基礎を置いており、スミスの不幸は彼が実際の動機と理論的動機との双方によって導かれている点にある、としているが、これは全く形式的な批判であるにとどまらず、問題を逆に解釈しているのであり、「理論的研究」と「実際の課題」との混同は、スミスの全概念および方法論から生ずる結果であって、彼の方法論における二元的性質を説明すべきある独立の原因ではなく、スミスの方法論上の二元的性質は彼の階級的立場に根差しているのである、とされる。D. ローゼンベルグ著、直井武夫訳、前掲書、319-320ページ。
- 19) I. I. Rubin, *ibid.*, p. 186. そしてルービンによれば、これらの方向の各々は、スミスをして、ある特殊な労働価値概念、あるいは、価値の基礎としての労働についてのある特殊な概念へと導く、すなわち、第一のものは、彼をして、ある所与の生産物の生産に費やされた労働の量という概念へ、第二のものは、ある所与の商品が交換をつうじて獲得もしくは購入する労働の量という概念へと、導く、とされる。I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 186-187.
- 20) すなわち、ルービンによれば、実際の諸問題に熱心に取り組む傾向をもっていた重商主義者たちにとっては、価値の理論は、その実際の課題として、価値の尺度を見出すということをもっていたのであり、経済学(political economy)が一かたまりの実践的諸規準から理論的諸命題の一つの体系へと転じられたのは、また、諸現象の背後には理論的な諸法則が存在するという考えが、(重商主義者たちがなしたような)実際の処方箋とあるいは(重農主義者たちがもっていたような)「自然法」と混ぜ合わされることが止んだのは、18世紀の道程をつうじてゆっくりとまた徐々にのみであった——また、多くは、スミス自身の努力によるものであった——のであり、スミスの価値論においては、真の経済諸現象の諸原因を理論的に研究するというこの課題は、まだ、実際の性質をもつ異質な諸要素からは脱して

いなかったのである、とされる。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 187.

21) この間の事情をルービンはつぎのように示している。それによれば、スミスの一般的な個人主義的および合理主義的アプローチが、価値尺度についての彼の探求のなかにも入り込んでいたのであり、スミスは社会—経済的諸現象の起源を、孤立した経済的個人の観点から、それらの諸現象がもつ効用によって説明する側面をもつのであるが、彼は、分業と交換を取り扱うときにも、同じアプローチを採択しており、交換に基づく分業は、各個人をして、彼自身の生産物を交換することによって彼が必要とする諸品物を獲得することを可能にするのであり、そしてまたそのために彼自身の生産物は、それを他の諸品物と交換できるという彼の能力のおかげでその個人にとって特別の意義を獲得する、とみられている。したがって、そのような個人の観点からすれば、提出されるべき最初の実際的な問題は、この品物が彼にとってどれほど大きな意義を有するか、すなわち、交換価値の正確な尺度は何であるか、ということになる。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 187.

22) その間の事情をルービンはつぎのように示している。それによれば、一見したところ我々は、我々が交換において獲得する他の諸商品の量を我々の尺度として用いることができる、と思えるであろう。すなわち、それらの商品の数が大きければ大きいほど、当該商品の価値はそれだけより高いというのである。だがスミスは、私自身の生産物と交換に私が受け取る商品の価値は、それ自体、絶えざる変動をこうむるという理由から、まったく正当にも、この解答を否定する。また、それと交換されるであろう貨幣（金）の量によって商品の価値を測定することも、同様に、不可能であるとする、そしてその理由は、金もまた価値において変動するからである、ということであった。I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 187-188.

23) その間の事情をルービンはつぎのように示している。それによれば、何によって生産物の価値を測定しようのかという問題に答えるためにスミスは、分業についての彼の理論に訴える。スミスは分業についての理論において、分業に基礎を置く社会とは、労働しまた自分たちの労働の生産物の相互交換をつうじて間接的に自分たちの労働を交換する人々の社会である、ということを示したのであるが、彼は、交換価値についてのあるきわめて価値のある客観的—社会学的構想（マルクスが、彼自身の価値論の基礎として使用するようになったもの）を用い、そしてそれに、ある主観的—個人主義的解釈を与えている。すなわち、スミスによれば、交換社会は、その社会の構成員たちの労働の相互交換に基づくこととされるのであるが、スミスは、孤立した個人の立場からすればこの交換は何に帰することになるかということを探ねるのであり、そしてそれに対するスミスの解答は、その個人自身の生産物と交換に他の人々の労働を獲得することによって帰する、ということであった。私が作った服地を砂糖あるいは貨幣と交換するさい、私は、本質的には、他の人々の

労働のある一定の量を、獲得しているのであり、私の服地と交換に私が処分しうるあるいはスミスの表現では「支配」しうる他の人々の労働の量が多ければ多いほど、それだけ私の服地はヨリ大きな価値をもつのである。社会的分業のゆえに、私は、私が必要とする生産物を、私が私自身の労働でもってそれらを生産するというよりもむしろ、私が私自身の労働でもって生産した生産物を交換することによって、獲得することができるのである。したがって、私は、私が生産したものの価値を、それを交換するときに私が受け取る他の人々の労働の量によって、測定することができるのである。ある所与の商品と交換に獲得もしくは購買されうる労働の量が、その商品の価値の尺度なのである。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 188.

なお、ルービンによれば、商品の価値の第二次的な尺度として、スミスは、その商品が交換をつうじて購買するであろうところの穀物の量を取りあげるのであり、そしてその理由は、ある所与の量の穀物は、つねに、ほぼ同一量の労働を購買できらうからである、ということであるとされる。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 188 n.

24) ルービンによれば、スミスは『国富論』第1篇第5章の初じめでは、一般に、他の独立の商品生産者たちの労働の生産物を獲得することによって彼らの労働を間接的に自由に使用するのでという考えをもっていたのであるが、この章が終るまでに、すでに、商品の、生きた労働あるいは労働力との、交換に、ヨリ大きな強調を付しつつあるのであり、そこでは、商品所有者は、「雇主」として、現われ、そして、労働と交換に引き渡される商品は、「労働の価格」あるいは労働者の賃金として、現われる、とされる。I. I. Rubin, *ibid.*, p. 190. なお、英訳者は、このことを示すものとしてスミスのつぎのような文章を引用している。「しかしながら、等量の労働は、労働者にとってはつねに等しい価値をもつにしても、労働者を雇用する者にとっては、比較的大きい価値をもつようにみえることもあれば、比較的小さい価値をもつようにみえることもある。雇主は等量の労働を、あるときには比較的多量の、あるときには比較的小量の財貨で買うのであって、雇主にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するように思われる。それは、前者の場合には彼にとって高価にみえ、後者の場合には安価にみえる。けれどもじつは、前者の場合に安価であり、後者の場合に高価であるのは、財貨のほうなのである。」(W. N., p. 33. 大河内訳< I > 58ページ。)I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 196-197 n. 4.

25) I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 188-190.

26) I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 190-191. ルービンは、価値尺度についてのスミスの学説を以上のように議論するのであるが、彼はさらに、この混乱した誤りの支配する一群の思惟と平行して、諸商品の価値における量的諸変化の諸要因の分析に向けられているところのもう一つの、ヨリ価値がありまた有望な理論的脈絡が存在するのであり、それら二つの理論的方向は、絶えず互いに交差している、として、そのこ

とに関するスミスの議論を検討している。それについては、I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 191-194. を見よ。なお、すでにみたように、ルービンは、スミスの議論では価値の実質的諸変化についての理論的研究は価値の最良の尺度に到達しようという^{ストック}実質的な課題と混同されている、とするのであるが、ここでは、ルービンは、「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」——ルービンによれば、それは、本質的には単純商品経済を意味する、とされる——についても資本主義経済についてもスミスは商品の価値はその商品が交換をつうじて購買しうる労働——ルービンによれば、単純商品経済では購買しうる具体化された労働、資本主義経済では購買しうる生きた労働という違いがある、とされるのであるが——の量によって測定されるとしている、とみ、そして、価値の実質的諸変化についての理論的研究においてはスミスは単純商品経済については労働価値説を、資本主義経済については生産費説を提示する、とみるのであるが、前者の単純商品経済での商品価値に関してスミスは商品の価値を、1) その商品の生産に費やされた労働の量によって、2) その商品が交換をつうじて購買しうる労働の量によって、という二つの道すじで決定しつつある、としている。また、スミスの議論における交換価値をルービンが、諸商品が交換される比率としてとらえている、ということを意味する叙述(I. I. Rubin, *ibid.*, p. 193.) も存在する。

なお、全体としてのスミスの価値論についてのルービンの検討のルービン自身による要約、および、スミスの理論と後代の諸理論との継承関係についてのルービンの指摘については、I. I. Rubin, *ibid.*, pp. 195-196. を見よ。また、*Ibid.*, pp. 373-377. も見よ。

結びに代えて

以上、1920年代に海外において発表された「アダム・スミスの価値尺度論」に關係する諸研究のいくつかをみてきた。

以下では、それらの研究の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず1926年のウォールシュの研究は前稿でみた1903年の彼の所論と共通する点を多く含むのであるが、彼は、この1926年の研究において、経済価値を「使用価値」、「尊重価値」、「費用価値」および「交換価値」とに分類し、そしてとくに価値尺度に関連するスミスの議論に関しては、そこに明示的に示されてはいない「尊重価値」に相当する考えが存在することを指

摘するとともにスミスの議論における「（交換）価値」と「価格」の関係に言及しつつ、また、前稿でみたR.A.マクドナルドと同様スミスの議論における「雇主の観点」と「労働者の観点」といったことに関連させつつ、スミスが財貨の「真実交換価値」を考えるさいには、その価値を「雇主の観点」から見、かつ労働者にとってのみ不変な価値をもつ労働——ウォールシュによれば、そこで言われている「価値」を「交換価値」ではなく「尊重価値」の意味にとれば、あるいはそのように言うこともできるかもしれない、とされるのであった——を、価値尺度とするといった矛盾をおかしている、とするのであった。しかしそのさいウォールシュは、事実上「尊重価値」が「交換価値」の尺度とされているということ自体については、ことさらそれを問題にはしなかったのであった。

他方、ダグラスは、スミスの議論では、交換比率としての（交換）価値の尺度ならびに源泉、決定因が労働に求められて労働価値説が展開されるのであるが、その労働価値説には、価値を決定するものは「投下された労働量」であるという考え方と「支配される労働量」であるという考え方という二つの考え方が含まれており、価値に関するこれら二つの説明は本質上きわめて違ったものであるがスミスはこれら両者を同じ程度に強調し、両者を区別できなかった、とする見方を示すとともに、「異質労働の問題」にたいするものとしての「市場のかけひきや交渉による調整」というスミスの議論には循環論的な傾向が存在することを認めつつも、『国富論』第1篇第10章での賃金格差に関する議論を援用することによってスミスはこの異質労働の問題に対処できたはずである、ということを指摘するのであった。ただし、ダグラスはスミスの議論における「価値の決定あるいは規制の問題」と「価値尺度の問題」とを同一視していたといえるのであり、したがってまた、「投下労働量」と「支配労働量」はともに、価値を規制するとともに価値を測定するものとして問題にされるのであった。

また、キャナンの所論の特徴は、スミスの議論にたいする否定的評価とということにある、といえよう。

最後に、ルービンによれば、スミスは「使用価値」と「交換価値」とを区別し、そして使用価値を研究の範囲外におき、明確にまた正しく彼の考察対象を交換価値に定めるのであるが、その「交換価値」についての研究にさいして、スミスは一方で価値の大きさおよびその変化を決定するものを考察しようとするとともに他方で不変の価値尺度を探求しようとし、その結果、スミスの価値論は、交換価値についての理論的研究だけでなく、経済理論としての価値の理論に固有なものでない実際的な問題である価値尺度の探求といったことを含むという方法論上の二元的性質をもち、それら二つの異質な研究を混同することとなった、とされるのであった。そしてまたルービンによれば、後者の最良の価値尺度の探求においてスミスは商品価値の最良の尺度を、その商品と交換に「購買されうる労働」に求めたのであるが、そのさいスミスは商品経済において労働を「交換する」というプロセスの社会的な性質を把握することができず、すべての商品経済に起こる労働の社会的「交換」を資本主義経済に生じる売買の対象としての労働の市場「交換」、労働の売買と、混同することによって、一つの社会的機能としての労働するという活動と一つの商品としての労働との混同、「購買される具体化された労働」（単純商品生産者たちのあいだの交換、あるいは、生産物と生産物との交換）と「購買される生きた労働」（資本家と労働者とのあいだの交換、あるいは、資本としての商品の、商品としての・労働力としての労働との交換）との混同をなすとともに、さらに、売買の対象としての・それ自体が一つの商品としての（購買される）労働を不変の価値尺度としようとするために、労働の客観的な量と労働が引きおこす総主観的労苦および骨折りとを混同した、とされるのであった。